龍と鳳凰（ほうおう）

龍も鳳凰も、想像上の動物で、これらが世に姿を見せることは最高の瑞祥とされた。龍は、中国では古くは最高神の使いや乗り物であったが、次第に辟邪（へきじゃ）祈雨（きう）の霊力をもった神霊中の傑物となった。さらには四霊〔応龍・鳳凰・麒麟（きりん）・霊亀〕の長となって、漢代には皇帝の象徴とされた。その形象は、角は鹿、頭は駱駝、眼は鬼あるいは兎、胴体は蛇、腹は蜃（しん）、背中の鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛に似ているといわれ、口には長髯をたくわえ、喉下には逆鱗があり、顎下に宝珠を持っているといわれる。秋になると淵の中に潜み、春には天に昇るとされる。鳳凰は、聖人が世に出て太平の世になると現れ、雄を鳳、雌を凰という。梧桐（あおぎり）に棲み、霊泉だけを飲んで60年に一度結ぶ竹の実だけしか食べず、飛べば群鳥が従う百鳥の王とされた。その形象は様々にいわれるが、嘴（くちばし）は鶏、頷（あご）は燕、頸は蛇、背は亀、尾は魚で、色は黒・白・赤・青・黄の五色とされる。